

# 一般 寄稿

児童教育学科

## 藤井能三小伝

—富山の近代を築いたパイオニア—



田尻 信壹

Shin-ichi TAJIRI

人間学部児童教育学科教授

### はじめに

藤井能三(1846～1913)は、明治期に活躍した富山県高岡市出身の実業家であり社会事業家であった。安田財閥の創始者、安田善次郎(1838～1921、富山市出身)や浅野セメント(現太平洋セメント)など多数の企業を興した浅野總一郎(1848～1930、氷見市出身)などの富山県出身の実業家たちとほぼ同時代を生きた人物であった。しかし、今日、藤井能三の名前や業績を知るものは地元の高岡市でも少ない。

私がこの人物を知ったのは、富山大学に勤務していたころ(2006～2011)であった。東京に戻ってからはほとんど忘れかけていた。藤井能三を思い出すきっかけと

なったのは、2017年の春に、目白大学の私の研究室にかかってきた一本の電話であった。富山市にある高志の国文学館(館長：中西進、富山市舟橋町2-22)の学芸員の方から、今秋に文学講座「巨人の物語をひもとく」という演題で富山県の偉人を紹介する連続講演会を開催するので、筆者に藤井能三について話して欲しいという依頼であった。筆者は教育学の研究者であり、歴史の専門家ではない。いわんや富山県の近代史に関する論文を発表したこともない。そのため、「能三については存じていますが、かれの研究者ではありません。なぜ私のですか」と尋ねた。学芸員の方の話では、藤井能三のことを調べていくうちに、筆者が富山大学に勤務していたときに附属中学校の教員(堀内和直先生)と一緒に書いた論文に目がとまったとのことであった。論文は10年前

(2007年)に書いたものであり、その中で私たちは藤井能三を「郷土の先人、偉人」という視点で中学校社会科の教材化を行った。そのときは、学芸員の方の熱意に押されて講演をお引き受けすることにした。講演では、その生涯を地域発展のために尽くし今日の富山県の礎を築いた人物として取り上げた。かれの業績は、富山県下初の小学校設立、国際港である伏木富山港の整備、石川県からの分県運動(富山県の誕生)、銀行の設立や鉄道の敷設など、その活躍は政治、経済、教育など多岐に及び、富山県の将来像を構想し今日の発展の礎を築いたパイオニアであった。また、地元の伏木に灯台(燈明台)や私立測候所の建設、当時珍しかったドイツ製消防ポンプの寄付などを行った。

この小論では、藤井能三について理解するための基本史料を紹介する。また、富山県の教育の基礎を築いた人物という視点から、藤井能三と富山県の教育の関係について取り上げる。

## 1 藤井能三という人物

藤井能三は、地元の高岡市伏木では「のうぞう」ではなく、敬愛の気持ちを込めて「のうそう」と呼ばれていた。この小論では、かれを能三<sup>のうそう</sup>と呼ぶことにする。

藤井家の先祖は能登の鹿島郡藤井村であり、寛永15(1638)年に越中の伏木に移り、代々、能登屋と号する船問屋を営んできた。幕末の頃、伏木には七軒の有力な船問屋があり、能登屋がその筆頭格を占め、越中一の豪商と呼ばれた。能三は、弘化3(1846)年に能登屋三右衛門の長男として誕生した。元治元(1864)年(19歳の時)に三右衛門を襲名し、22歳の時に明治維新を迎えた。維新後、能登屋三右衛門からそれぞれ一字ずつ取って、能三を名乗ることになった。

では、能三とはどのような人物だったのか。かれの来歴については、伏木小学校に建てられた能三の銅像<sup>(1)</sup>台座に刻まれた銘文が分かりやすい。

表 藤井能三の生涯

弘化3(1846)年		能登屋三右衛門の長男として誕生する。
元治元(1864)年	18歳	三右衛門と改名し、翌(1865)年、能登屋の家督を継ぐ。
明治2(1869)年	23歳	加賀藩から神戸出張を命じられる。
明治3(1870)年	24歳	能登屋三右衛門を藤井能三と改称する。
明治6(1873)年	27歳	吉田五十穂を校長に迎え、伏木小学校を開校する。
明治8(1875)年	29歳	岩崎弥太郎と会見する。海運業に進出する。
明治11(1878)年	32歳	伏木共有灯台(燈明台)を建設する。伏木港修築を県に願い出る。
明治14(1881)年	35歳	伏木に消防組を組織し、ドイツ製消防ポンプを寄付する。伏木に海運会社(北陸通船会社)を設立する。
明治15(1882)年	36歳	高岡で越中改進黨を組織する。
明治16(1883)年	37歳	富山県が誕生する(石川県からの分県化)。
明治17(1884)年	38歳	金沢第十二国立銀行と富山第二百二十三国立銀行が合併し、頭取に就任する。能三が設置した伏木私立測候所が観測を始める。
明治19(1886)年	40歳	松方デフレの影響を受け、能三が経営する海運会社が倒産し、全財産を失う。
明治24(1891)年	45歳	「伏木築港論」を書く。
明治26(1893)年	47歳	中越鉄道敷設委員、同株式会社創設委員となる。
明治31(1898)年	52歳	農工銀行取締役役に当選する。
明治32(1899)年	53歳	庄川改修期成同盟会幹事に選ばれる。
明治33(1900)年	54歳	伏木商工会議所が設立され、会頭に就任する。庄川改修工事、伏木港築工事が始まる。
明治35(1902)年	56歳	庄川改修の監督(人夫請負い)につく。
明治40(1907)年	61歳	中越運輸合資会社の社長に選ばれる。
大正2(1913)年	67歳	没する(能三銅像台座の銘文では68歳)。

(筆者作成)



写真1 藤井能三

写真2 伏木小学校内に建つ能三の銅像  
(筆者撮影2017年)

写真3 能三が設立した伏木小学校 (筆者撮影2017年)

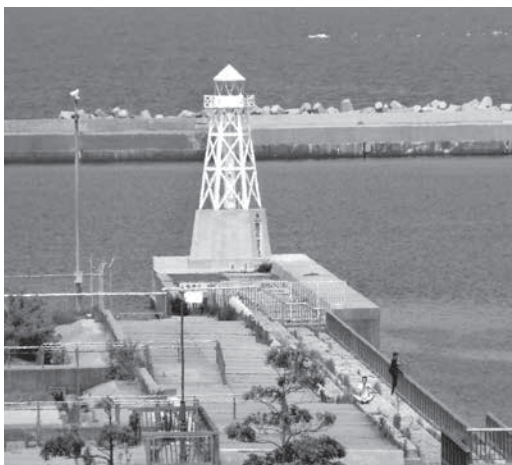


写真4

明治11(1878)年に能三が伏木港に建設した共有灯台(燈明台)(写真の灯台は後に復元されたもの。筆者撮影2017年)



写真5

能三が伏木に設置した私立測候所。明治17(1884)年から観測が開始された(現在は資料館。筆者撮影2017年)



(銘文) 藤井嘉稱能三越中伏木人治兵衛子也用力世益損  
 賞創郷校又與衆謀舟車利便設燈于其海岸開道于  
 天田嶺明治甲午 賜藍綬褒章名播遠邇年六十八  
 大正癸丑殉

(大意) 藤井嘉他郎能三と称す。越中伏木の人で、治兵衛  
 の子である。力を世益に(公共のために)用い、賞  
 を損して(自分の資金を出して)郷校(学校)を創  
 る。また、衆と謀り舟車(交通機関)の利便をは  
 かり、海岸に灯台を設置し、天田の嶺(天田峠)  
 に道を開く。明治甲午(27年)に藍綬褒章を賜う。  
 その名声は遠邇に(はるか遠方まで)及ぶ。年68  
 歳にして大正癸丑(2年)に亡くなる。

- ①教育・寺社に関するもの：27点
- ②皇室・藩侯に関するもの：12点
- ③法令・職制・訴訟・冠婚・災害・救恤に関するもの：  
80点
- ④海防・警備に関するもの：10点
- ⑤港湾・運輸に関するもの：71点
- ⑥産業・土地に関するもの：52点
- ⑦地図・絵図類：54点
- ⑧芸能に関するもの：4点

これらの史料中で能三の思想を知る上で基本的史料  
 とされるのは、「越中国明治初年交通沿革」(明治41、  
 1908)、「伏木築港論」(明治24、1891)、「小学校取設伺」  
 (明治6、1873)、「伏木校の創立」(明治41、1908)の四  
 史料である。前掲の二史料が交通や産業振興に関わる文  
 書、後掲の二史料が小学校開設に関わる文書である。

「越中国明治初年交通沿革」は、能三の晩年62歳の時  
 に自身によってまとめたもの、明治8(1875)年頃の富  
 山県の交通事情や、岩崎弥太郎の三菱会社所有汽船の伏  
 木港への誘致の状況が書かれている。また、「伏木築港  
 論」は能三が残した史料の内でもっとも有名なものであ  
 る。ここでは、当時、開設したシベリア鉄道の東の終着  
 点、ウラジオストクと伏木港を結びつける壮大な構想が  
 語られている。能三自身が一字一字丁寧に書き上げたも

## 2 藤井能三に関わる史料

1804年(文化年間)以来の藤井家四代にわたる記録や  
 能三に関わる史料は、今日、『藤井家文書』と呼ばれ、  
 310点が高岡市立伏木図書館に保管されている。能三の  
 次男であった陳三が伏木図書館に寄贈し、その後、発見  
 された文書を加えて、1970年に目録が作成されている。  
 目録では、『藤井家文書』は以下の八テーマに分類されて  
 いる。

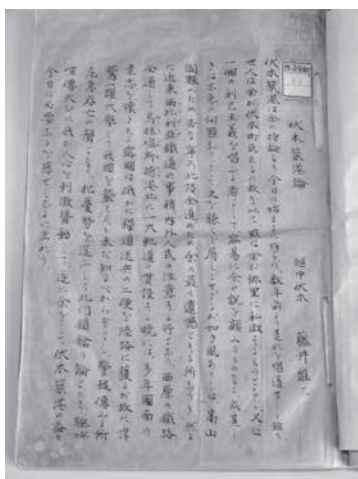


写真6 「伏木築港論」  
 (筆者撮影2017年)

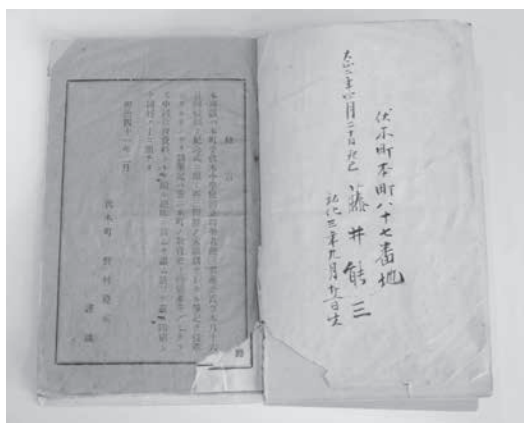


写真7 「伏木校の創立」  
 (筆者撮影2017年)

ので、私たち現代人にも十分に読むことができる(写真6を参照)。「小学校取設伺」は、学制公布の翌(1873)年に、能三が小学校開設を県に申し出た文書である。「伏木校の創立」は、明治41(1908)年の伏木小学校第36回開校記念の式典で能三が児童に行った講話を、校長の野村範家が書き留めた記録である。伏木小学校の開設事情がよく分かる史料である。記録によると、能三は講話を行うことを再三固辞し、また遠慮がちに講話したということである。ここにも、能三の人柄がよく表れている。

能三の事跡に触れた後世の書籍としては、以下のものがある。どれも高岡市立伏木図書館に所蔵されている。

- ・桂正直(1892)『中越名士傳』清明堂
- ・天池初枝(1933)『我が郷里伏木の父 藤井能三』
- ・高岡市立伏木小学校伏木子ども風土記学校博物館編(1965)『藤井能三伝』藤井能三顕彰会
- ・富山県教育史編纂委員会(1966)『富山県教育史 上』
- ・伏木港史編さん委員会編(1973)『伏木港史』伏木港海運振興会
- ・伏木小学校史編さん委員会(1973)『伏木小学校史』高岡市立伏木小学校
- ・正和勝之助(1995)『越中伏木湊と海商百家』桂書房

これらの書籍の中で、高岡市立伏木小学校伏木子ども風土記学校博物館が編纂した『藤井能三伝』が能三に関する最も詳しい伝記である。本書には能三に関わる写真や絵図、『藤井家文書』に入っている代表的史料が掲載されており、大変充実したものになっている。巻末資料として、前述の「越中国明治初年交通沿革」、「伏木築港論」、「伏木校の創立」が活字に起こされて掲載されている。この小論を執筆する際にも利用させていただいた。

### 3 ● 藤井能三と教育

では、能三の活動を「富山県の教育の基礎を築く」という視点から見よう。維新後の能三は加賀藩の職を辞して伏木に戻り、実業の世界に身を投じるとともに岩崎

弥太郎、渋沢栄一などの中央財界の人物とも交流をもった。能三の思想の根幹は、近代的企業家としての精神であった。能三が明治14(1881)年に創設した北陸通船会社の創設趣意書には、「富国のもとには産業にあり、産業を振興するは…(中略)…広く貿易の道を開いて以て貨物を四方に運漕せざるべからず」と記されており、地元・富山県の発展の基礎としての「殖産興業」「貿易振興」の重要性を説いていた。維新直後に、欧米との交流の乏しかったこの地にこのような近代的な感覚を持った人物が出現したことは驚きである。能三が「殖産興業」「貿易振興」の実現のためにまず着手したことが、その担い手としての人づくりであった。そのための方法として、富山県に欧米的な学校教育を導入することであった。明治5(1872)年に学制が公布されると、能三はいちはやく学校づくりに着手した。能三は慶応義塾出身の吉田五十穂を校長として雇用し、明治6(1873)年に県下最初の小学校(私立学校)を開設した。職員数4名、児童数は76名であった。そのとき、能三は、学校の書籍・教材1700余円分を東京の書店から私費で取り寄せている。伏木小学校は、当時としては大変進歩的な教育が行われた。伏木小学校史編纂委員会(1973)『伏木小学校史』に興味深い文章が掲載されていた。そこでは、明治6(1874)年に入学した一回生の高辻喜作が、当時、授業で地球儀が使われていたことを紹介していた。

私は、3年間ほど寺子屋にかよって、「藤井さんの学校」に上がりました。…(中略)…

学校では、ずんずん新しい知識が授けられた中に、理科の時間だったと思います。先生が地球儀を持って来て、太陽は動かないもので、地球が西から東へ回転して昼夜の別ができるものであることを教えられました。私は学校から帰って復習するときに、ばあさんにその話をしたのです。そしたら、「そんな馬鹿なことはない、お日様は動くもの。地球は動かないものである。そんなまちがった教えをするものはヤソの信者であるから、そんなことをこれからは言ってくれるな」と手を合わせて頼まれたことを覚えています。…(後略)…

伏木小学校史編さん委員会(1973)

『伏木小学校史』高岡市立伏木小学校、47頁

伏木小学校では、今まで見たことのない地球儀が使われるとともに英語が教えられ、子どもたちは新しい考え方と知識に目を輝かせていた姿が目に見え、伏木小学校は、地元では「藤井さんの学校」と呼ばれ、現在は230名ほどの児童が通っている（2017年の調査で同校を訪問した時にお聞きした）。また、同校では、昭和40（1965）年から毎年、能三の命日である4月20日にその遺徳を顕彰するために「能三祭」が行われている（写真8を参照）。



写真8

能三祭の様子を報道する新聞  
（伏木小学校で筆者撮影、2017年）

## おわりに

能三は地域社会の発展のためにその生涯をささげ、私欲に走らない高潔の人物であった。能三は、40歳の時に、岩崎弥太郎との間の海運事業の競争に敗れて全財産を失った。その後の能三には、実業家としての活動に目を引くものは少ない。しかし、能三はその人望を生かして庄川の改修や伏木港の整備などの社会事業に献身し、地域の発展に寄与した。能三は権勢を誇ったときは奢る

ことなく、また、財を失ってからは卑屈になることもなかった。能三は、その生涯のほとんどを地元の伏木で過ごした。まさにローカルに生きた人物であった。また、かれの著書「伏木築港論」に見られるように、グローバルな視点を意識した人物でもあった。能三は「蟻の目」と「鳥の目」を兼ね備えた人物といえる。しかし、能三にはもう一つ、重要な目ももっていた。かれが公共の意識と高い道徳性を兼ね備えていたことであった。すなわち「人の目」を備えていた。能三は、「蟻の目」と「鳥の目」、そして「人の目」を備えた稀有な人物であったといえる。

## 注

(1) 藤井能三の銅像は、広く寄付を集め、大正11（1922）年に建設された。台座の銘文は小杉熙の撰である。能三の銅像は、その後、戦時下の昭和19（1944）年に金属回収のために供出されたが、昭和27（1952）年に再建された。写真2は再建された銅像である。

## 謝辞

藤井能三の調査にあたっては、浦田正吉、太田久夫、白川裕美、原田真由美の各氏、高岡市立伏木小学校、同市立伏木図書館、富山県教育記念館、同県公文書館に大変お世話になりました。諸氏、諸施設・機関の皆様のご教示に対して深く感謝申し上げます。